

死者と生者の夏

牧師 山本 護

「八月は六日九日十五日」と詠まれているように、日本の8月は先の大戦が想起され、平和とは何かを考える時期。沖縄地上戦や本土空襲、広島と長崎への原爆投下で何万人が死んだ、と戦争の悲惨は量的に語られます。それが戦争の実体を表す尺度だとしても、人間の死が量的に積算されるほど抽象度は高まり、リアリティが遠のく気がします。

敗戦後シベリアやカザフタンに抑留された詩人の石原吉郎は関東軍ハルピン特務機関にいたため、1949年反ソ・スパイ行為の罪状で重労働25年の刑期を言い渡され、スターリン死去の恩赦で1953年に帰国。十数年を経て石原はこう記しています。

「私がつもつと恐れたのは〔忘れられる〕ことであつた～それは独房でのとらえどころのない不安とは違い、はっきりとして具体的な恐怖であつた～ここにおれがいる。ここにおれがいることを、日に一度必ずおもいだしてくれ。ここでおれが死んだら、おれが死んだ地点をはっきり地図に書きしるしてくれ～もし忘れ去られるなら、かならず思い出させてやる。望郷に代る怨郷の想いは、いわばこのようにして起こつた(『望郷と海(1971)』)」。

石原吉郎は自らの体験を軸にして、ナチスによるユダヤ人虐殺についても言及しています。「おそろしさは、一時に大量の人間が殺戮されることにあるのではない。そのなかに、ひとりひとりの死がないということが、私にはおそろしいのだ～死においてただ数であるとき、それは絶望そのものである。人は死において、ひとりひとりその名を呼ばなければならないものなのだ」。

「女が自分の乳飲み子を忘れるであろうか。母親が自分の産んだ子を憐れまないであろうか。たとえ、女たちが忘れようとも、わたしがあなたを忘れることは決してない。見よ、わたしはあなたを、わたしの手のひらに刻みつける(イザヤ49:15～16)」。誇らしい事も恥ずかしい事も、愛した事も罪深い事も、人間一人ひとり創造主たる神に憶えられ、この名と共に私の隅々を御自分の手のひらに刻みつけておられる。

「人は死において、ひとりひとりその名を呼ばなければならない(石原吉郎)」。猛暑、容赦ない陽射しが世を断罪しているかのような8月。神の手のひらに刻みつけられた大切な死者の名を、一人ひとり静かに呼びたい。神の御手は生も死も超えているのだから、そこには死者も生者も並んで刻まれているのだと思います。Ω



※石原吉郎(1915～77) 1938年旧制松山高校の講師をしていた E.ヘッセル(K.バルトの直弟子)より受洗、翌年信濃町教会へ転籍。1977年信濃町教会にて告別式。